親和会
コミュニティ誌
令和8年(2026)
No. 284

［発 行 元］ 伊豆高原親和会 ☎0557-53-1122

親和会ライフNavi 5月号

親和会公式掲示板

「完済弁」が息づく、海と山のあいだの伊豆高原

伊豆高原のまちを南北に走る伊豆急行線。
この線路をひとつ越えるだけで、海側と山側では、暮らしの景色がほんの少し違って見えてくるから不思議です。海へ向かえば、城ヶ崎の断崖と黒潮の気配をまとった古い集落が点々と続き、その中心のひとつが「**完済(かんさい)**」と呼ばれる地区です。

ここには今も、潮風のようにやわらかく響く独特の方言 -完済弁- が息づいています。

完済弁は、伊豆の中でもとりわけ“海の匂い”をまとった方言だと言われています。黒潮に乗って往来した伊豆七島の言葉とも近く、語尾は丸く、どこか歌うような調子があります。
「～でしょう？」は「～だら？」、「～だよ」は「～ずら」と。 語尾に風が抜けるような軽さがあり、耳にすると潮騒のリズムが重なって聞こえてきます。

日々の会話にも味わいがあります。「どこへ行くの？」は「どこ行くずら？」、「大丈夫？」は「だいじょうぶだら？」 。呼びかけの「おめえさん」「あんたぁ」も、どこか親しみがあって、相手との距離を縮めてくれます。親和会エリアから少し離れた古い集落では、年配の方が「～してくりょう」(～しておくれ)と口にすることがよくあります。 今では耳にする機会が減りましたが、ふと聞こえてくると懐かしい温もりが灯ります。

この言葉が育った背景には、海とともに生きた暮らしがあるようです。
城ヶ崎の険しい海岸線は、漁に出るにも危険が伴い、家族や仲間との結びつきが自然と強くなりました。互いに声を掛け合い、助け合う日々の中で、相手を包み込むような柔らかな言葉が育まれたのでしょう。

一方、線路を越えて山側へ入ると、言葉の響きは少し変わります。大室山の裾野に広がる火山台地は、昭和の時代に全国から移住者が集まり、標準語に近い話し方が主流になりました。農の文化と新しい住民文化が混ざり合い、海側とはまた異なる“もうひとつの伊豆高原”が形づくられているようです。

使い手は少しずつ減っているものの、完済弁はこの土地の大切な文化遺産です。「今日はいい天気ずらねぇ」といった、なんでもない一言に、海と暮らしの歴史がにじみます。

【左から、新珠三千代、高島忠夫、谷幹一、冨士眞奈美 ©読売テレビ放送】

筆者が10歳の時に放映された「細腕繁盛記」、冨士眞奈美さん演じる強烈ないびり役の義妹の「おメエぇずら～」が強烈にのこっています。舞台になった熱川温泉の言葉も完済弁とは親戚らしいです。
伊豆急行線は、ただの交通インフラではなく、海と山、古い言葉と新しい暮らしの境界を見守ってきた“文化の分水嶺”でもあったのです。

縁あってこの地に暮らす私たちも、地域の宝として、この言葉にこれからも耳を傾けていきたいと思います。 完済弁が運んでくる海風のような温かさを、未来へとつないでいけたら、伊豆高原の風景はきっとさらに豊かになるような気がします。

ちなみに「大阪城の石切職人が伊豆に来て、完済に住みついたので“関西”」という伝承は、完全に否定はできないものの、確証はないらしいです。

教えて！班長さんのこと。

「班長さんって、具体的に何をするの？」
班長経験のない記者が、自身が住まう第1地区の武内 博 会長に、そんな疑問にお答えいただきました。私たちに暮らしを支える親和会 自治会活動をもっと身近に感じて頂ければ幸いです。

🍀 班長さんの主なお仕事は？

一番の役割は、自主防災における会員把握です。『安心の窓口』として災害時に備えて近隣の状況を把握したり、皆さんの要望を役員に伝えます。そして『環境づくり』、ゴミステーション清掃のとりまとめなど、美化活動のリーダーを務めます。 班長さんがゴミステーションを清掃するわけではありません。 また地域の代表として『会議への参加』、年に数回、地区の情報交換の場（地区連絡会、班長会など）に出席します。

🍀 どうやって決まるの？

基本は **「輪番制（持ち回り）」です。親和会には1地区から4地区までありますが、例えば1地区では6つの班に分け、定住の20～30件を1～2名の班長が担当しています。
地区によっては「話し合い」で決める場合もありますが、みんなで少しずつ負担を分かち合うのが今のルール。任期は4月からの1年間** です。

【ひと言メモ】
「心よく引き受けてもらえると、とっても助かります！」という武内会長。 地区連絡会の議事録（年数回の開催で、だれでも参加出来ます！）などの資料は大切に保管し、次の班長へバトンタッチしていきましょう。みんなでつくる、安心で住みやすい街。 班長の順番が回ってきた際は、どうぞよろしくお願いいたします！

定住届は　住民票を移してなくてもオッケー。二拠点生活でもオッケー。こちらで一定期間を過ごされる方は、防災の観点からも届けて頂けると「いざというとき」に連絡出来ます！
ご自身の地区や班を確認し、ゴミ収集カレンダーと一緒に冷蔵庫等に貼っておきましょう。　　（あひる）

広報誌の「ゴミステーション置き配」への想い

～広報誌の配布方法と、ゴミステーション維持管理についてのご報告～

昨年7月から、広報誌の「ゴミステーション置き配」と「年3回の全会員郵送」を始めました。これまで広報誌はボランティアの皆さんが定住会員のお宅へ届けてくださいましたが、2,900世帯という規模では、別荘利用の会員に行き届きにくい不公平さや、配布負担の偏りがありました。

そこで、50箇所のゴミステーションに広報誌を置く方式へと切り替えました。これは単なる置き配ではなく、配布担当者がステーションの見守りを兼ねた仕組みです。

また、戸別配布を見直したことで生まれた予算を、年3回の全会員郵送や広報内容の充実に活かせるようになりました。

「前は届けてくれたのに」という声もありますが、今回の変更はすべての会員が等しく情報を受け取れる体制を整えるための一歩です。

親和会は、会員全員の穏やかな日常を守ることを目的としています。

ご自身で広報誌を手に取っていただく、その小さな行動が、公平であたたかなコミュニティづくりにつながります。今後とも、どうぞ温かく見守っていただければ幸いです。

また、親和会ホームページも随時更新しています。 パソコンが少し苦手な方でも、スマホで気軽にのぞいてみてください。　（Coco）

親和会広報

伊豆高原五月祭に息づく若き創造の力
― 新に加わる、新進の才能 ―

伊豆高原で開催中の「五月祭」に、今、静かに人の心をとらえる作り手たちがいる。
それぞれ異なる分野から今という時代に向き合い、「生きること」と「つくること」の意味を問いかけている。

小野 心明(オノ ココア) 氏は、伊東に生まれ、東京、そしてパリへと学びの場を広げ、フランス国立工芸院にて学位を修めた気鋭の作り手である。

その歩みは、単なる技術の研鑽にとどまらない。異なる文化や思想を往還しながら、彼女が手掛けるのは布を用いた子供服や小物作品である。

繊細な手仕事、世界でただ一つの子ども服や小物たちによって生み出される作品には柔らかな感性と確かな技術が息づいている。

今回の展示では「自由」をテーマに、空へと羽ばたく青い鳥のモチーフが、印象的に配されている。 やわらかな布に宿るぬくもりは、どこか遠い記憶を呼び起こすように、見る者の心を静かにほどいていく。

もう一つの世界をひらくのは、廣瀬貴洋氏と廣瀬美樹子氏による夫婦作家である。

東京藝術大学大学院で研鑽を積んだ二人は、それぞれ異なる感性を携えながら「生命」という根源的な主題に向き合い続けている。 夫である廣瀬氏は、日本画の伝統技法を用い、爬虫類や両生類といった一見異質な存在に、生命の奥底に潜む力を見出し、緻密に描き出す。

その画面には、美と不気味さが同居し、観る者を静かな緊張と深い思索へと導く。

一方、妻の美樹子氏は、鳥や花をモチーフに柔らかな色彩と空気の揺らぎの中で、生命のやさしさとぬくもりをそっと描きだす。対照的でありながら、その根底に「生きものへの深いまなざし」という共通の軸が通っている。

取材を終え作品に触れたあとに残る、言葉にならない余韻。 五月祭とは、単なる展示の場ではなく、人の内側に静かに触れる「時間」と出会う場所なのかもしれない。ぜひ足を運び、その空気をゆっくりと味わっていただきたい。

(銀のシッポ)

暮らしと自然の中に アートをみつけよう

駅から下ると小さな漁港の町があり、防波堤の向こうに海が広がります。

そして桜並木に囲まれた坂道をのぼった先に休火山 大室山、さらにそこから天城連山へとつながります。

五月祭はこの土地から発信する文化・アートの祭りです。 ギャラリーやアトリエだけでなく、玄関先であったり駅前のスーパーの売り場であったりと、様々な場所に「わたくし美術館」が出現します。

わたしたちが考える観光とは、その土地の自然や暮らし、文化の中に輝きを見つけること。新緑の季節、伊豆高原は特別な一ヶ月間を迎えます。

静かだけれども豊かな祭典、 それが伊豆高原五月祭です。（文:伊豆高原五月祭実行委員会HPより）

伊豆高原五月祭 パンフレットは
左のQRコードから

伊豆高原で広がる苺のある暮らし

「いちご一会」がつなぐ、優しい時間

伊豆高原で、「いちご」を通じた新しい暮らしの形が広がっています。その中心となっているのが「伊豆高原イチゴ倶楽部」です。

この活動は、いちご栽培を通して日々の暮らしに楽しみを取り入れることを目的に始まりました。参加者は苗を育てながら、収穫やスイーツ作りなど、それぞれの形で「いちごのある暮らし」を楽しんでいます。

4月11日にイトーピアで開催された催しでは、「伊豆ガーデニングクラブ」主催のフリーマーケットに出店し、採れたてのイチゴを販売しました。多くの来場者が足を止め、関心を寄せていました。

移住者と地元の人が共に暮らす伊豆高原において、こうした活動は人と人をつなぐきっかけにもなっています。イチゴ倶楽部では、その出会いを「いちご一会（一期一会）」と捉えています。

その言葉のとおり、小さな出会いの積み重ねが、地域にやさしいつながりを生み出しています。

伊豆オープンガーデン2026 開催中
主催／伊豆ガーデニングクラブ
090-2749-9827
https://www.izu-gardeningclub.com

『総会案内』と『出欠連絡ハガキ』を郵送にてお届けしています。

『出欠連絡ハガキ』は、ご出欠にかかわらず必ずご投函ください

5月30日（土） 親和会総会を開催します。

総会は、これからの親和会をみんなで考えるひとときです。 総会に続いて、いま私たちが向かいあう課題について語り合う時間も設けます。 お一人お一人の声が、親和会の明日を少しずつ前へ進めます。
皆さまのご参加を心よりお待ちしております。